



# どの子にも 生きる喜びと勇気とを ～失われていく惻隱の心～

三浦捷也

(三浦歯科医院 院長)

文部科学省の「問題行動・不登校調査」で2016年度のいじめ認知件数が過去最多の32万件に急増したことが明らかになった。小学校ではいじめの認知件数だけではなく、暴力行為件数と不登校の児童数も過去最多。いずれも低年齢化が進んでいる。いじめの内容は「からかうや悪口」、「遊ぶふりをして叩く、蹴る」、「仲間はずれ、集団による無視」などなど。東京都内の公立小の校長は、「感情のコントロールができず、言葉よりも先に拳を上げる児童が増えた。児童同士の小競り合いは毎日のように起きている」と明かす。小学生とは思えぬ陰湿さに呆れる。学校では自殺・いじめに加えて、教師による体罰、セクハラが後をたたない。教育行政への信頼も大きく揺らいでいる。

子どもをめぐる教育環境は依然として改善されておらず、学校や家庭、社会が構造的に抱えている問題をあらためて浮き彫りにしている。

## －失われていく惻隱の心－

近年、子どもたちの危機的状況が衝撃的な事件となって噴出している。心が寒くなるような事件が相次ぎ、残忍化、低年齢化している。その他、基本的な生活ができない子、すぐにキレる子、子ども同士で楽しく遊ぶことのできない子などが目につく。子どもは、無邪気で純真だとする子ども観は、そのままでは通らなくなってきたようだ。人間の成長、発達、人格形成な

どに強い影響を与える大切な時に、様々な形で人への思いやりの心が蝕まれつつある。

もともと、人間はどの人も生まれながらにして、惻隱（そくいん）の心（※思いやりの心）を持ち、「惻隱の心無きは人に非ず」と言われてきた。更にわが国には「もののあわれ」を知り、人と人との関係を大切にす美風があった。それなのに、近頃「わが子の命を守る」という子育ての基本をも忘れてしまったような親に関する報道があふれ返っている。私たちは「緊急事態」として、社会と家族のあり様について問い直されるべきだ。

## －76歳になって見えてきたこと－

私は、私自身で子どもを育て、孫の姿を観察し、歯科診療を通して、障害を持つ人たちと深く接し、小学生の野球と関わり40年。今76歳になって、ようやく、今まで見えなかったことも少しは見え、感ずるようになった。

なかでも、子どもたちとの野球を通しての40年間は、子ども観はもとより、社会観、人生観、ものの見方、捉え方まですべて大きく変化した。子どもの実像、本音、親との関係を知り、あらためて子どもをめぐる社会問題と小学生スポーツの抱える問題には共通する病理のようなものを実感することになった。言い換えると、現代の子どもが抱える社会問題を解決するには、まず、小学生スポーツの現場から「子どもに対す

る接し方を変えなければならない」そんな気持ちが日々強くなっていった。

### －成果主義・勝利至上主義・学力重視－

「夢があり、自立に向けて大切な時期」である小学校期に「勉強ができるように」「スポーツは常に勝たねばならない」と子どもの尻を叩き、「人生の勝ち組になることが幸福切符を手に入れること」と親は植えつける。また、学校も格付けされ、子どもたちは早くから、よい学校と言われている学校を目指して、塾通いを強いられている。

大人が子どもの個性を伸ばすことや、優しい心を育てることを怠り、人と人との関係を見捨てた成果主義、勝利至上主義、学力重視の考え方が最優先されている。更に加えて、近年ネット中毒に象徴されるように、人は他者との共感性を失って混沌としている。

### －異常な社会の意識環境－

子どもの起こす問題は、大人のつくった社会、人間の生き方が深く関わっているのに、大人たちは、いつも根本的な解決をはからず、「対症療法」だけに終わり、大人自身は一向に変わろうとしない。だから、同じような事件が後をたたない。こうした状態を是正も克服をもしようとするこの社会の意識環境の方がよほど異常だ。

世の大人たちは驚くでもなく、怒るでもなく、語ろうともしない。この閉塞的で、無気力で、無責任な大人たちを勘の鋭い現代っ子たちはどう受け止めているか。私はそのことが気になる。我々大人が平静を装い、他人事のように高みの見物をしゃべりこんでいる間に、事態はますます深刻化し、複雑化している。

### －「自由と個性」と「笑顔」を失う子どもたち－

今、子どもたちは、我々の子ども時代に比べ、

物質的な面だけではなく、配慮の面でもあり余るほどの対応を受け、それを当然として生活をしている。しかしながら、その一方で、子どもたちにとって最も大切な「自由と個性」が奪われた。時には笑顔や素顔までも失っている。大人が「教育熱心」を隠れ蓑にして、自分の積み残してきた問題を子どもに転嫁したり、また、勉強さえできれば、テストで良い点数を取ればいいといったちょっと薄っぺらな「点取り虫」志向が子どもから人を思いやる心や、生きるための喜びや勇気を喪失させた一因ではないだろうか。子どもへの愛情があっても、それが親のエゴによるものであったり、服従させるためであったら、子どもには、愛情としては伝わらず、逆に子どもの心を傷つけ、不信感を増幅させる。大人には子どもが持つ個性と能力を尊重し、世間体や打算を捨て、広い視野で子どもを見守り、支える責務がある。

### －親がわが子をまるごと愛せているか－

今、世の中は紛争、戦火が絶えず、国の内でも争いや犯罪も絶えない。異常気象による災害が各地で猛威をふるっている。先行き見えない不透明感の強い時代が続いている。

「勉強のできる子、スポーツで勝つこと」が最優先の子育てから「子どもの特性を理解し、一人一人の思いや考え方を大切にす」子育て議論が必要ではないだろうか。

親がわが子をまるごと愛せているか。子どもは親から信頼されてこそ満たされる。わが子に過剰な期待を押しつけていないか。子どもの気持ちを尊重する一方で、親自身が、地域や社会と真摯に向き合い、精いっぱい生きる姿を見せることである。これが真の家庭教育だと思っている。